

育教の兒幼

月七年三十和昭

つゆばれ

いつまでたつても、なぜいつまでもあんないだらう。暗い子、じめへしてさつぱりしない子、その陰鬱さが、入園の當初から氣にかゝつて、早くなんとかしてやりたいと思つても、そう思つて側へよればよる程、雲が濃くなるやうな子。そういう思つては悪いが、子をもらしくないこころが、こつちの氣持ちをも、こう長くなつてはいやにさせる子。正直にいへばこの頃少々うんざりさせられてゐた子。――

その子がけふは、なんといふ明るいこころが、さつぱり晴々しいこころが、こつちからば、いつもの癖で一寸隠して置いていたのを、むかふから雲を破つて笑みかけて来る。その急な變化に、いままでのこころはすつかり忘れて、こつちもけふは、爽かな目でその子を見なほし、胸をあけて大きなきを吸ふ。

いくら長くねてるたつて心配するこころはない。つゆばれはきついたいの子たち来る。

(倉橋惣二)